

2014年 アメリカ学会第48回年次大会（沖縄大会）プログラム

（アメリカ学会 HP 上で大会参加登録をお願いします）

1. 開催日 2014年6月7日（土） 6月8日（日）

2. 会場：沖縄コンベンションセンター（詳細は同センターHP 交通アクセスをご覧ください）

〒901-2224 沖縄県宜野湾市真志喜 4-3-1 TEL：098-898-3000 / FAX：098-898-2202

3. 受付 会議棟 A エントランスホール

4. プログラム （詳細は大会当日に会場で配布する【大会要項】に明記します。）

第1日 6月7日（土）

午前の部 自由論題 9：15～12：00 会議棟 B B1～B7 会議場

【自由論題A 政治・軍事・外交】

司会：高田馨里（大妻女子大学） 討論：佐々木卓也（立教大学）
伊藤孝治（大阪大学・院） 「1890年代後半における米国の島嶼政策の展開

－ハワイとキューバを中心に－

奥広啓太（ニューヨーク州立大学オルバニー校・院） 「国防を巡る政治における政軍関係：

陸軍省と議会、1939年から1941年」

繁沢敦子（広島市立大学・院） 「第2次世界大戦後の米軍再編・統合の軌跡

～文民指導者の役割を中心に～

四方俊祐（神戸大学） 「冷戦初期の米国の対台湾援助政策と華僑」

小林聡明（韓国・慶熙大学） 「VOA 移転費肩代わり『密約』と沖縄返還

－在沖縄 VOA 中継所移転をめぐる日米・韓米交渉－

【自由論題B 政治経済・公共性】

司会・討論：佐藤千登勢（筑波大学） 討論：肥後本芳男（同志社大学）
天野由莉（東京大学・院） 「1793年フィラデルフィアにおける黄熱病の流行と『感性』の

パラダイム」

遠藤寛文（東京大学・院） 「正統性と偶然性 ー無効宣言論争(1828-33)に見る合衆国における

主権観念の諸相」

上田貴和子（一橋大学・院） 「都市復興における性ー1906年サンフランシスコ大地震後の

歓楽街再建から売春宿撲滅政策までー」

須藤功（明治大学） 「アメリカはIMFを支配できたか？（1945～1952年）」

山縣宏之（立教大学） 「米国シアトルにおけるソフトウェア産業の展開と社会経済的インパクト

ー集積要因・政策の寄与・成長の裏面ー」

【自由論題C 戦争と占領の記憶・トランスナショナル文学】

司会・討論：生井英考（立教大学） 討論：山本秀行（神戸大学）
与那覇恵子（名桜大学） 「米軍占領下の沖縄（1945～1953）における教員たち

ーその悩み、社会的地位と役割が示す沖縄の独自性ー」

白井洋子（日本女子大学）「戦場の記憶－W・D・エアハートと浜田知明の作品から－」

高田とも子（九州大学・院）「『神』なる力、原子力と創世の物語

－William L. Laurence の原爆ナラティブに関する考察－

牧野理英（日本大学）「収容所の記憶と70年代の日系アメリカ：カレン・テイ・ヤマシタの *I Hotel* におけるアメリカ資本主義へのトランスナショナルな批判的見地をめぐって」

星野文子（一橋大学・講）「カリフォルニアにおける詩人ヨネ・ノグチの誕生」

【自由論題D カリフォルニア・ハワイ・アジア系】

司会：高木(北山)眞理子（愛知学院大学） 討論：貴堂嘉之（一橋大学）

目黒志帆美（東北大学・院）「併合前夜におけるハワイ王国の独立維持の試み

－カラカウア王によるフラの『復興』と『創造』－

伊佐由貴（一橋大学・院）「第一次世界大戦の選抜徴兵制とハワイ日本人移民」

徳永悠（南カリフォルニア大学・院）「メキシコ系コミュニティに対する日系人強制収容の影響

－ロサンゼルス郡ランチョ・サンペドロ地区を中心に－

南川文里（立命館大学）「トランスパシフィック・リトルトーキョー：

人の移動の1952年体制と在米日系人社会」

大八木豪（京都大学）「1960年代・1970年代におけるアジア系アメリカ人の国際主義：

東アジアの地政学、チャイナタウン、人種化」

【自由論題E 文学と大衆文化】

司会：余田真也（和光大学） 討論：舌津智之（立教大学）

岡島慶（早稲田大学）「*The Bluest Eye* における語りと癒し」

長谷川詩織（愛知教育大学）「At Home in Africa－オサ・ジョンソンとアフリカにおける家庭づくり」

Meghan Kuckelman（名桜大学）“Comic Books and Selfhood in Leslie Scalapino’s *Zither & Autobiography and Trilogy*”

社河内友里（三重大学）「アメリカン・コミックスにおけるビートニック表象と反順応主義：

1990年代以降のリバイバルにおけるスーパーヒーロー像を中心に」

Mari Nagatomi 永富真梨（Doshisha University 同志社大学・院）“Internationalization of Hillbilly

Music: Charlie Walker, Hiroshi Toyama and Country Music in Postwar Japan”

昼食休憩 12:00～13:00

理事・評議員会 12:05～13:00 会議棟A A2会議場

午後の部 会議棟A A1会議場

会長講演 “America through Asian Eyes” 13:10～14:50

Chair, Commentator : Yuko Matsumoto 松本悠子 (Chuo University 中央大学)

Speakers :

Nam Gyun Kim (Pyeong Taek University / President, ASAK 韓国アメリカ学会会長)

Jun Furuya 古矢旬 (Hokkai School of Commerce / President, JAAS

北海商科大学、アメリカ学会会長)

清水博賞・斎藤眞賞授賞式 14:50~15:00

Symposium “United States Policy toward East Asia and Okinawa”

15:10~17:50

司会: Fumiaki Kubo 久保文明 (University of Tokyo 東京大学)

Speakers:

David Welch (University of Waterloo)

Masaaki Gabe 我部政明 (University of the Ryukyus 琉球大学)

Koji Murata 村田晃嗣 (Doshisha University 同志社大学)

Edward I-hsin Chen 陳一新 (Tamkang University 淡江大学)

懇親会 18:00~20:00 会議棟 A レストラン

.....

第2日 6月8日(日)

部会 午前の部 9:00~11:30 会議棟 B B1~B7 会議場

【部会 A “Winning the Hearts and Minds: Ideology, Wars, and American Intelligence”】

Chair: Tosh Minohara 箕原俊洋 (Kobe University 神戸大学)

Paper 1: Brian Masaru Hayashi (Kyoto University 京都大学) “Centralizing Intelligence, Creating Hierarchies: The OSS, Asian Americans, and Race during World War 2”

Paper 2: Haruo Iguchi 井口治夫 (Nagoya University 名古屋大学) “Intelligence Missionaries in Japan: Bonner Fellers, Boris Pash and Paul Blum”

Paper 3: Yoshiomi Saito 齋藤嘉臣 (Kyoto University 京都大学) “Covert Propaganda for a Free Europe: The NCFE, CEEC and the Politics of Exile in the US and UK” (tentative)

Commentator: Yasuhiro Izumikawa 泉川泰博 (Chuo University 中央大学)

【部会 B 「人の移動」と島嶼・海域をめぐる越境世界】

司会 菅(七戸)美弥 (東京学芸大学)

報告1 野入直美 (琉球大学)

「帝国時代の『移動する子どもたち』—ハワイ・台湾・沖縄を中心に—」

報告2 李里花 (武蔵野美術大学)

「戦前のハワイにおけるコリア系移民のトランスナショナリズム」

- 移動、アイデンティティ、祖国独立運動—
報告3 ジョハンナ・ズルエタ Johanna Zulueta (創価大学)
「沖縄における基地労働と移動」
討論 矢口祐人 (東京大学)

【部会 C 公民権法制定後半世紀、アフリカ系アメリカ人文学・文化は変わったか？】

- 司会・討論 木内徹 (日本大学)
報告1 西本あづさ (青山学院大学)
「誰がブラックか—人種・文化の境界再考とトニ・モリスン、そしてポストソウル世代の作家たち」
報告2 宮本敬子 (西南学院大学)
「黒人女性表象は変わったか—ポスト・ソウル世代のアーティスト Kara Walker と Mickalene Thomas の場合」
報告3 鳥居祐介 (摂南大学)
「アメリ・バラカとジャズの制度化—*Blues People* (1963) から *Digging* (2010)へ」
報告4 川村亜樹 (愛知大学)
「スポーツ映画のなかのヒップホップ世代—*The Blind Side* (2009) の死角」

【Workshop A “Embodiment and the Boundaries of the Human”】

- Chair: Yasuko Takezawa 竹沢泰子 (Kyoto University 京都大学)
Panelists:
Daryl Joji Maeda (University of Colorado, Boulder) “Hybridize the Dragon: Bruce Lee’s Transnational Body”
Amy Sueyoshi (San Francisco State University) “Asia, America, and the Transnational ‘Pro-Queer’”
Yuko Takahashi 高橋裕子 (Tsuda College 津田塾大学) “Body, Gender, and Boundaries: The Embodiment of Education at Women’s Colleges in 21st-Century America”
Commentator: Etsuko Taketani 竹谷悦子 (Tsukuba University 筑波大学)

昼食休憩 11:30~13:00

分科会 11:40~12:55 (内容については、下記「分科会のご案内」を参照ください。)

新理事会 11:40~12:40 会議棟 A A2 会議場

総会 13:00~13:30 会議棟 A A2 会議場

部会 午後の部 13:40~16:10 会議棟 B B1~B7 会議場

【部会 D 既存システムの限界と専門知の活用】

- 司会 中島 醸 (千葉商科大学)
報告1 平体由美 (札幌学院大学) 「20世紀初頭南部の公衆衛生をめぐる専門知—伝統知—現場知の
軋轢」

- 報告 2 中嶋啓雄 (大阪大学) 「戦後日本における知的交流の再生——アメリカ研究者とロックフェラー財団」
- 報告 3 榎田久代 (敬愛大学) 「1989年エクソン・バルディーズ号油流出事故後の事故再発防止への取り組み」
- 討論 大津留 (北川) 智恵子 (関西大学)

【部会 E コンタクト・ゾーン (異文化接触地帯) としての沖縄】

- 司会 喜納育江 (琉球大学)
- 報告 1 山里絹子 (名桜大学) 「米国統治下の沖縄における『米留』制度—米国留学経験者のアイデンティティ形成と交渉過程—」
- 報告 2 山城雅江 (中央大学) 「物量のアメリカと沖縄文学」
- 報告 3 石原昌英 (琉球大学) 「米国民政府の英語普及プロパガンダ」
- 討論 山本伸 (四日市大学)
- 討論 吉原真里 (ハワイ大学)

【部会 F スポーツをとおして見るアメリカ】

- 司会・討論 川島浩平 (武蔵大学)
- 報告 1 清水さゆり (ミシガン州立大学)
- 報告 2 南修平 (長野県短期大学) 「ベースボールに込められたもの—『栄光の日々』の中のニューヨーク労働者階級」
- 報告 3 永田陽一 (野球史研究者) 「女子職業野球団ポピーズの日本遠征 (1925年) —日米野球交流史の一章として—」

【Workshop B “Pacific Worlds: Empire, Environment, Embodiment”】

Chair: Fumiko Nishizaki 西崎文子 (University of Tokyo 東京大学)

Panelists:

Yu-Fang Cho (Miami University of Ohio) “Fertile America, Infertile Asia, and Anti-Nuclear Movements”

Kwangjin Lee (Soongsil University) “What Does Bartleby Prefer Not To?: Reinterpretation of Bartleby’s Resistance with Organizational Theories”

Mayumo Inoue 井上間従文 (Hitotsubashi University 一橋大学) “Critique of Friendship: On Global Sovereignty and Its Nation-forms”

Commentator: Grace Hale (University of Virginia)

5. 注意事項

- 1) 大会参加登録は、当学会ホームページの大会参加登録ページ上で5月7日までにお願い致します。今年度は大会会場となる沖縄コンベンションセンターに提出する書類の関係上、早めに参加者数を把握する必要がありましたため、アメリカ学会のホームページ上で3月上旬より参加登録を開始させていただき、3月末でいったん集約いたしました。その後も登録を受け付けておりますので、まだの方は5月7日までにお願いいたします。
- 2) 懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録でお申し込みのうえ、懇親会費 6,000円を同封の払込書にて5月7日までにご納入ください (期日厳守)。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので、ご注意ください。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 非会員の大会参加費は1,000円です。会場受付にてお支払いください。
- 5) 昼食:6月7日 (土)、8日 (日) とともに、沖縄コンベンションセンター内レストラン「太陽市場」

をご利用できます。また、お弁当の申し込みも受け付けますので、希望者は大会参加登録ページからお申込みのうえ、同封の払込書で5月7日までにご納入ください。

6) その他、随時、学会 HP および会員用メーリングリストで情報をお伝えしていきます。

7) 会場までの交通アクセスは、沖縄コンベンションセンターHP をご覧ください。会場は那覇市内ではなく宜野湾市にあります。

8) 宿泊や交通手段の確保も各自でお願いいたします。なお、学会 HP に JTB 沖縄の航空券・宿泊予約ページを掲載しますので、必要に応じてご利用ください。

6. 会場案内

受付	会議棟 A	エントランスホール
書店等の出展	会議棟 A	エントランスホール
本部スタッフ・役員控室	会議棟 A	A2 会議場
外国人ゲスト控室	会議棟 A	A3 会議場

6月7日(土)

午前 自由論題	会議棟 B	B1~B7 会議場
昼食時 理事・評議員会	会議棟 A	A2 会議場
午後 会長講演・授賞式・シンポジウム	会議棟 A	A1 会議場

懇親会 会議棟 A レストラン

6月8日(日)

午前 部会およびワークショップ	会議棟 B	B1~B7 会議場
昼食時 分科会	会議棟 B	B1~B7 会議場
新理事会	会議棟 A	A2 会議場
総会	会議棟 A	A2 会議場
午後 部会およびワークショップ	会議棟 B	B1~B7 会議場

第48回年次大会 分科会のご案内 6月8日(日) 11:40~12:55

*会場はすべて会議棟 B B1~B7 会議室です。部屋割りは参加登録者数を見て決定します。

**午前・午後の部会・ワークショップに使用される大き目の会議室を分割してご使用いただく分科会もあり、分科会の開始前と後には、会議室の分割と統合の作業が必要になります。参加者の皆様には協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

1. 「アメリカ政治」 責任者：西山隆行（甲南大学）nisiyama@center.konan-u.ac.jp

テーマ：「日米の福祉国家レジームの比較」

報告：佐藤晶子（大阪大学・院）「科学技術の受容と変容：占領期の公衆衛生を事例として」

討論：未定

2014年度のアメリカ政治分科会は、前半で、覇権国で占領を主導したアメリカが、被占領国の日本で、自国の科学技術をどのように受容させ、変容させたかという課題について、報告していただく。具体的には、米国大統領府予算局顧問であった W. エドワーズ・デミングの統計的品質管理が民間主導の抗結核薬製造を促し、結核死亡率低減という日本の公衆衛生向上に貢献した過程について説明していただく。その上で、アメリカと日本の社会政策の性格の違いについて検討する。その際には、何名かの討論者を交えて議論し、日米の福祉国家レジームの特徴について考察することにした。

後半では、次年度以降のアメリカ政治分科会の在り方について参加者から意見を寄せていただき、アメリカ政治分科会、ひいては、アメリカ政治研究の在り方について検討・考察する。時間が許せば、最新の研究動向や各種資料の入手方法などについて、情報を交換する機会も設けたい。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：藤本博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp

報告：平田雅己（名古屋市立大学）「ベ平連による脱走米兵支援活動と米国の干渉 1967-68年」

本年度は平田雅己氏（名古屋市立大学）に報告をお願いし、冷戦史研究の課題に関する議論を引き

続き行ないたい。平田氏からは、1967年から68年にかけて「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」が日本国内で展開した脱走米兵支援活動に対する米軍当局の監視・干渉活動の実態について報告していただく。平田氏の報告目的は、ベ平連の活動に関する米軍当局の公文書の内容を紹介し、これまで十分に研究されてこなかったベ平連運動の国際的影響力の一端を明らかにすることにある。近年、外交史と社会運動史を架橋する視点や、各国における社会変容を射程に入れた冷戦史研究の可能性が語られている。平田氏の報告ならびにフロアーからの質疑を通じて、とくに外交史と社会運動史を架橋する研究上の意義や方法論等について議論を深めることを期待している。

3. 「日米関係」 責任者：浅野一弘（札幌大学）k-asano@sapporo-u.ac.jp

報告：照屋寛之（沖縄国際大学）「基地問題と選挙」

討論：浅野一弘（札幌大学）

「沖縄の中に基地があるのではなく、基地の中に沖縄がある」と形容される程、沖縄には巨大な米軍基地があり、それが戦後69年、祖国復帰後42年を経ても存続し続けている。戦後の沖縄の政治・行政はもちろんのこと、選挙に大きな影響を与えた。復帰後も県知事選挙をはじめ各種選挙のたびに基地問題が争点の一つであった。

2000年以降の選挙では、普天間飛行場の名護市辺野古への移設の賛否をめぐって与野党が激しく争ってきた。ところが、最近の選挙では、自民党も辺野古移設では選挙を戦えなくなったので、これまでの「辺野古移設」から「県外移設」を訴えるようになり、争点のぼけた選挙が繰り返される傾向があった。にもかかわらず、選挙後自民党の県選出国會議員、自民党県連、県知事は辺野古移設を容認することになり、選挙時の公約は悉く破棄され、有権者との信頼関係を大きく損ねている。

本報告では、沖縄の政党の選挙公約が基地問題によってどのように影響され、公約が破棄される背景を中心に、基地を抱えた沖縄で基地問題が政党、選挙にどのような影響を与えているかを論じたい。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp

報告：木下なつき（北海道武蔵女子短期大学）「企業・組織形態から見る黒人生命保険会社の歴史と戦略」

アメリカ合衆国において、生命保険会社の歴史は、人種・エスニック集団の相互扶助の歴史でもあり、様々な企業・組織形態の変遷ともなってきた。本報告は、黒人に主眼をおき、まずは、植民地時代からの友愛組織を通じた相互扶助の伝統、奴隷解放後、19世紀後半のフラタernal保険組合の形成、そして、19世紀末から20世紀前半までの黒人生命保険会社設立期までを概観する。続いて、1940年代～50年代の黒人生命保険会社ビジネスの最盛期から、1960年代以降の縮小期を見ていく。その際、株式会社か相互会社かという企業形態の選択が、黒人生保各社の地域的・社会経済的背景や経営戦略と関連する事を明らかにし、黒人生命保険会社のリスクに対する態度を検討したい。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp

テーマ：アジア系アメリカ人の生活と戦争トラウマ：実践と理論

報告1：北脇実千代（カリタス女子短期大学）「アジア系アメリカ研究とビューティ・カルチャー」

服飾産業にたずさわるアジア系アメリカ人が増えてきたことを背景として、近年ファッションに関する研究がアメリカで多くみられるようになってきた。本報告では、このような研究動向もふまえて、戦前のロサンゼルス日系アメリカ人社会における裁縫学校に焦点をあて、日系人女性にとって裁縫を修得することの意義、また裁縫を通して女性たちが日系人社会のビューティ・カルチャーの形成にどのように関わったかをみていきたい。

報告 2: Yasuko Kase 加瀬保子 (University of the Ryukyus 琉球大学)

“Bridging Theories of Trauma and Disability: War Trauma and the Asian Diaspora”

Analyzing two Asian American literary texts on World War II, *Odori* (2007) by Darcy Tamayose and *Anshu: Dark Sorrow* (2010) by Juliet S. Kono, this presentation examines the drastic effect of disabling trauma on the sense of the normalcy, temporality, and spatiality of the diasporic subject by bridging trauma and disability studies.

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者：小野直子 (富山大学) ono@hmt.u-toyama.ac.jp

報告：白石 (那須) 千鶴 (淑徳大学他・講) 「動物利用のジェンダーと植民地主義—19 世紀アメリカの毛皮取り引きと大平原先住民部族の変容を取り上げて」

本報告の趣旨は、19 世紀アメリカ大陸の大平原で行われていた毛皮交易が大平原先住民部族に与えた影響を、植民地主義の問題性から捉え直した上でジェンダーの観点から分析することである。これまでアメリカ社会の動物問題の議論は、白人中産階級を中心とする動物擁護運動、倫理的菜食主義の主張の流れから、英米に特有な動物保護の動向が強調されてきた。しかしその動物観の主張に多文化主義的観点が欠如していることは、致命的問題点と言わざるを得ない。そこで本報告では、先住民文化と動物の問題を取り上げることからアメリカの動物問題を捉え直し、同問題がジェンダーの観点からのみならず植民地主義的観点から分析議論する必要性があることを示したい。その為に、19 世紀後半に大規模に展開された西部開拓の中で、大平原部族に悲劇的影響を与えたバッファロー激減の問題を取り上げ、致命的影響を受けた大平原部族文化をバッファロー依存への過程から動的に捉え直した上で、そのバッファロー専門化の生活様式の変化が先住民女性に与えた影響を当時のアメリカ社会の植民地主義的視線とともに分析する。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円 (大妻女子大学) mdsato@otsuma.ac.jp

報告：伊藤敦規 (国立民族学博物館) 「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館の Info-Forum Museum 構想の報告」

日本国内のいくつかの博物館や研究機関等は、米国先住民に関する物質文化資料および映像・音響資料を所有している。しかしながらこれまで、その所在やデータ管理についての体系的な調査や研究はほとんど行われてこなかった。本発表の目的は、第一に、米国南西部先住民 (特にホピ) の民族誌資料の日本国内の所在と情報管理の現状を報告し研究者間での共有を図ることにある。またその過程で、資料の来歴が収蔵機関によって多用で、ドキュメンテーションの状況も機関間での統一は見られない点が明らかになる。こうした現状に対して国立民族学博物館は、「フォーラム型情報ミュージアム」構想を立ち上げ、収蔵機関・ソースコミュニティ (民族誌資料の制作者や使用者やその子孫)・研究者・一般の利用 (閲覧) 者の利便性を高める計画を 2014 年 4 月に開始した。本発表の第二の目的として、フォーラム型情報ミュージアム構想の概要を説明するとともに、その運用の前提となる研究者とソースコミュニティの人々との協働の必要性について、文化人類学的観点から考察する。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史 (東京理科大学) takafumi@rs.kagu.tus.ac.jp

報告：石川敬史 (東京理科大学) 「J・G・A・ポーコックの『新しいブリテン史』におけるアメリカ革命」

初期アメリカ研究は、アメリカ研究一般の中でもとりわけ大西洋史諸研究の成果との相性が良い研究分野といえよう。事実、近年においても社会史、経済史、教会史、政治史などの各分野で活発な研究活動が展開されている。

こうした近年の動向に鑑みて、本分科会では、報告者が翻訳に参加したJ・G・A・ポーコック『島々の発見―「新しいブリテン史」と政治思想』(名古屋大学出版会、2013年)におけるアメリカ革命論を紹介し、ブリテン史の文脈から見たアメリカ・カナダ論を検討する。

本報告の狙いは、『マキャベリアン・モーメント』に示されるようなポーコックの難解複雑なアメリカ革命論を検討することではなく、彼のブリテン史研究の成果を通して、初期アメリカ研究により豊かな視野を提供することにある。

9. 「文化・芸術史」責任者：小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp

報告1：深見麻(日本女子大学・講)「万国博と地域のアイデンティティの再構築：金門博(1939-1940サンフランシスコ)を例として」

本発表では、1939年にサンフランシスコで開催された金門万国博覧会が、いかにして地域の歴史や文化の独自性を視覚的に訴えていったのか、そこに西部の中心都市としての自意識がどう織り込まれ、また時には新しい物語として語られようとしていったかを検討する。使用する史料は主催者トップの手記、博覧会のパンフレット、プロモーション用のイベントや写真、記事、観客の回想録で、比較のためにパナマ博やニューヨーク博にも若干言及する。

報告2：瀧井直子(早稲田大学・講)「エト・ゲンジロウとロバート・スチュアート・キューリンをめぐって」

エトは世紀転換期の米国で活躍した日本人画家である。近年はオノト・ワタンナの小説の挿絵の作者として注目されているが、その活動はまだ謎に包まれている。一方、キューリンはブルックリン美術館のアジア美術部門の基礎を築いた学芸員で、3度来日した。キューリンの友人だったエトは、彼の作品収集における不可欠な協力者でもあった。報告では二人の交遊関係からエトの実像に迫り、20世紀初期の日米文化交流の一端を紹介する。